

月刊マカラボ

Vol.03
2025.7.1



高校生訪問

CPS研究室に到遠館高校から高校生が訪問してくれました！運営陣の方からの感想をいただいています！

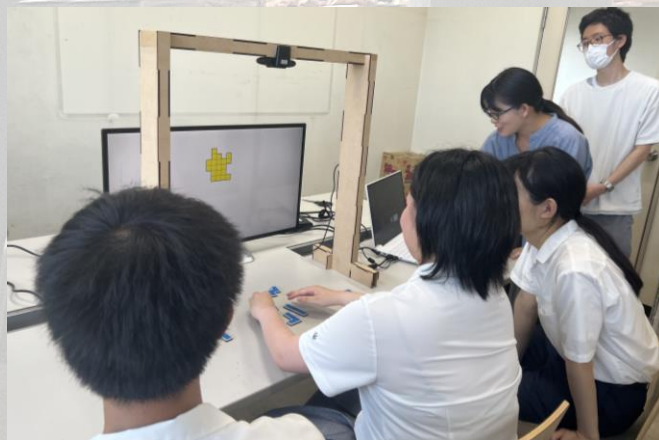
致遠館高校の生徒たちとの交流は、自身の研究を客観的に捉え直す絶好の機会となりました。特に、複合現実に関する研究内容を高校生に分かりやすく説明する難しさを痛感しました。普段は深く掘り下げている技術も、基礎から順序立てて伝えることで、その本質的な価値や将来的な可能性を伝えることができました。また、実際にシステムを高校生たちに使ってもらい、新鮮な感想を聞くことができたので今後の研究に生かしていきたいと思います。母校の後輩たちに自身の研究を紹介できる滅多にない機会だったこともあり、非常に楽しく充実した時間となりました。今回の企画・運営をサポートしてくださった先輩方には、大変お世話になり、心より感謝申し上げます。何かから何まで手厚いご支援をいただき、本当にありがとうございました！

執筆:小柳 達哉



致遠館の高校生訪問において、研究のデモンストレーションを通じて自身の研究を紹介する中で、専門知識を持たない高校生に研究内容を伝えることの難しさを実感しました。限られた時間の中ですべての研究内容を説明しようとする、かえって理解しにくくなってしまったため、内容を厳選し、要点を絞って伝えることを心掛けました。特に、私自身がB3で研究に初めて触れた際に強く関心を持ったYOLOの映像認識技術について、その面白さを重点的に伝えることに力を入れました。全体を通して、高校生たちに大学と研究室の雰囲気、そして大学生の研究生活について良い印象を持って帰ってもらえたのではないかと思います。また、この今回の経験を通じて、自分自身もより面白いと思ってもらえるような研究をしたいと改めて実感しました。

執筆:山本 亮輔



AIに関する高校生向けの講義で、ティーチャブルマシンを用いたデモンストレーションを行いました。このツールを使うことで、AIの仕組み、特に機械学習のプロセスを視覚的かつ直感的に伝えることができ、高校生も積極的に参加してくれました。彼らの「AIってこんなに簡単に作れるんだ！」という驚きの声を聞き、複雑なAI技術を分かりやすく伝える重要性を改めて認識しました。また、高校生が実際にAIを動かし、その結果を見ることで、AIが私たちの生活にどのように役立つのか、どんなことに気をつけたら良いのかなどを一緒に考えるきっかけになりました。今回の経験を通して、私自身の研究をユーザー視点で考える良い機会となりました。今後は、専門知識を深めつつ、社会との対話を意識した研究を進めていきたいと考えています。

執筆:緒方 浩暉



先生コラム

～ 夢中になれるものを探して～

どんな学生時代を過ごしたのか？とか、なぜ大学教授になったのか？みたいなお題を頂いたので、昔を思い起こしながら色々書きます。

高校生の時は、盆正月以外はサッカー部で運動ばかりしていました。福岡県大会の一步手前(ベスト32)で負けてしまったのですが、負けた相手(福大大濠高校)が決勝まで勝ち進んだので、自分達ももう少し何かできたのではないかという悔しい思いが残りました。九州工業大学では、アルバイト三昧で、ほとんど大学には行かずに音楽に傾倒していました。実家が音楽教室をしていたので、それを継ぐことを割と真剣に考えていました。当時、坂本龍一さん(YMOというグループで「教授」と呼ばれていた)が結構好きで、現在、教授になっているのはその辺のミーハーな影響も若干あると思います。

卒業後の最初の就職はどうにも性が合わなくて、今後40年以上をサラリーマンで過ごすのはとても無理だと直ぐに悟って11ヶ月で会社を辞めました。やばい方向に片足を突っ込みかかっていたのですが、その後、一念発起して20代半ばに広島大学の大学院に入り直しました。そこで、おもしろい研究に出会って、5年間は狂ったように研究に没頭していました。一度大学に来たら、3日間くらいは帰らないのが当たり前でした。4、5日ぶりに帰ろうとした際にバイクを停めた場所を完全に忘れてしまい、盗難と勘違いして警察に盗難届けを出したことがあります。

先日、文部科学大臣賞を受賞した際に写真と一緒に写っているのが私の恩師で、研究のイロハを徹底的に叩き込んでいただきました。本当に良い先生で感謝しかありません。そのお陰で当時やっていた研究が結構バズって、通産省の機械技術研究所(現在の産総研)に入所できました。ドラマのような展開で我ながら下剋上だったと思います。

その後30代半ばくらいまでは、ベンチャービジネスにのめり込んでいました。ホリエモンが世に出てきた頃です。当時は中島みゆきの地上の星(プロジェクトXのテーマソング)をエンドレスで聴きながら全国を飛び回っていました。大きな投資が得られてこれからというところで、競合する会社から私が訴えられて(本当に悪いことをした訳ではなくて所謂妨害を受けたのです、後日謝罪を受けました)、紆余曲折あって手を引きました。

それから、九州に戻って来て、その後は特になんの不満もなく、産総研九州センターで安泰に研究をしていましたが、逆に、先が見通せるような気がして、打ち込むものもなくなってしまい、気がついたら迷えるオッサンになっていました。その頃は、犬のように走りまわっていて、フルマラソンも4時間くらいで走っていました。スマホの総走行距離を見ると東南アジアくらいまでは走っている計算になります。お陰で膝関節がすっかりすり減って痛いのです。

広島大学での5年間の研究室生活は私にとって一生の宝のような時間だったので、いつかは大学の研究室に戻って研究がしたいという思いをいつも持っていました。これには、恩返しのような思いも半分あります。45歳の時にご縁があって佐賀大学に異動しました。最初は学生が4人しかいなかった研究室でしたが、お陰様で10年間で立派になったなあ感慨深く思っています。学生の皆さんが立派になって世に出ていくのをいつも嬉しく思っています。

とりとめなく、私の半生のお話に付き合ってくださいましたが、私がお伝えしたかったのは、人生をおもしろく生きるためには、目標とか夢みたいな原動力が必要ではないかということです。これまでに、何度かそれを失っていた時期があるのですが、その時が一番しんどかったように思います。目標とか夢、価値観は人によって違いますし、私のように寄り道し

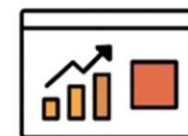
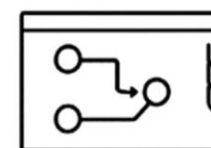
たり、途中で変化したりする人もいるかも知れません。意外と自分でも気づいていない自分が眠っていたりするものです。また、壁とか限界は、意外と案ずるより産むが易しとも思っています。うまくいく時/いかない時の「光」と「影」の境界は本当に紙一重です。一度きりの人生ですから「迷わずいけよ、行けば分かるさ byアントニオ猪木」の精神が大事だと思います。「なんのために生まれて、なにをして生きるのか、こたえられないなんて、そんなのはいやだ! byやなせたかし」というのは、皆さんもご存知のアンパンマンの歌ですが(私はNHKの朝ドラ「あんぱん」を毎日見えています!）、昔、子育てをしている頃に深い歌詞だなあ〜といつも思っていました。皆さんも、まさに、自分探しの旅をこれから始める時期なのではないかと思っています。どうか、一人一人が皆さんらしく楽しく幸せな旅にして下さい。

執筆: 福田 修

ゼミのスライドで意識していること

ゼミ発表のスライドでは、「見やすく、伝わりやすく、でも眠くならない」ことが一番大事だと思います。まず、決まった構成に沿って情報の流れを整え、全体のストーリーが自然につながるように意識します。内容は欲張らずに絞り込み、スライドは“話す自分のアシスタント”くらいの立ち位置で考えるとちょうどいいです。図や強調で「ここ見て!」と視線を誘導するのも効果的です。……と、これはあくまで私個人の意見です!!

見やすく、伝わりやすく、
でも眠くならない



ここ見て!



執筆: リー ジン イェン

編集後記



こんにちは、広報の姫城です。
今回の表紙は、CPSでのBBQです!
BBQの計画・準備をしてくださった方々、ありがとうございました!
ヨー先生が仕込んだお肉もとっても美味しかったです!!!